「戦争と平和！」
第26回

＜食は愛と希望と平和を育む＞

岡部 まさ子

「平和でなければ、飢餓ゼロの目標は達成されない。飢餓があれば、平和な世界はこない。」2020 年度のノーベル平和賞を授与された､国連世界食糧計画(WFP)のビーズリー事務局長は、このように コメントしています。

WFP は、1961 年飢餓のない世界を目指して設立され、被災地や紛争地での緊急事態に食料配布を通して、人々の命を守り、更なる紛争の武器として、飢餓が利用されないよう阻止する活動をしています。

国連 WFP
レッドカップキャンペーン

現在、紛争の激しいイエメン、シリア、南スーダン、エチオピア等、中東やアフリカの国々では、多くの人々が飢餓に苦しんでいます。紛争や内戦は食料不安や飢餓を引き起こし、食料不安や飢餓は、紛争を引き起こすという悪循環となっていると言われています｡そのような状況の中で、食料の安定供給が、平和の可能性を高める為に求められています。平和な社会にあってはじめて、毎日の安定した食を得る事が出来るように、食と平和は、深く関わっているのです。

2019 年の国連報告では、紛争や貧困によって、世界中で 6 億 9000 万人の人々が飢餓に苦しみ、満足な食料が与えられていない、加えてコロナ禍で、事態は深刻化していると報告されています。WFP 日本事務所代表焼家氏は、「紛争や貧困の中にあって､アジアやアフリカの子ども達にとって、WFP から支給されている学校給食が、唯一の栄養源となっている、給食は子ども達に、困難を乗り越える力となり、明日への希望に繋がっている｡」と子ども達の未来に希望を託しています。

しかし、コロナ禍後の世界では、食料不足や食料の高騰が懸念されていて、この機に食料輸出国はますます富み、輸入国では、食料不足に苦しむ人々が増加すると予想され、富の偏重は拡大していくでしょう。そのような食料危機にこそ、国際協力が必要なのではと思われますが。

私達の社会の現実も同様に、新自由主義という競争原理が蔓延り、自己責任が求められ、経済格差は年々拡がっています。このコロナ禍で、真っ先に影響を受けた母子家庭では、日々の食事を二食に減らしているという報告があります。（しんぐるまざぁず・ふぉーらむ)学校給食が命綱となっている子ども達も多く、休み明けには、痩せて登校 すると聞きました。フード・バンクでは、コロナ禍で、高齢者や若者の食料配布の要請が、増えているとの事です。反面、自給率が４割にも満たない私達の国に於いて、昨年は 620 万トンの食料品ロスがあったとの報道に接し、「食」という窓を通して、世界の様々な現実が迫ってきます。

2020 年のノーベル平和賞は世界食糧計画(WFP)に決まった＝ロイター
（日本経済新聞 10 月 9 日）

「何時も食料品を送って頂き、有り難うございます。米びつにお米がある安心感、本当に感謝しています。」これはフード・バンクへ届けられたお礼状です。私の所属しているサークル食トコでは、「生きることは食べること、食べることは生きること」を活動の柱としていますが、私達に出来る事として、身近な地域の中で、食を通して支え合う事の大切さを実践している、フード・バンクの働きに、ところざわ倶楽部の皆様と共に協力しております｡子ども達が、明日への希望を失わないように。支え合う社会、平和な世界を願って。